（様式５）　　平成31年度（2019年度）　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	管31K11	氏　名	野々村　麻奈
研究主題 ―副主題―	望ましい自己の生き方・在り方を考えるキャリア教育 ーキャリア・アンカーの概念を用いたアセスメントの活用を通してー		
派遣先	玉川大学　教職大学院	担当教官	谷　和樹　　山口　圭介
所属	教育庁指導部指導企画課	所属長	小寺　康裕

キーワード：キャリア教育　キャリア・アンカー　キャリア・パスポート

1　研究の目的・主題設定の理由等

本研究の目的は、児童が自己理解を深め、望ましい自己の生き方や在り方について考えるキャリア教育の実現に向けて、エドガー・H・シャインの提唱する「キャリア・アンカー」の概念を用いたアセスメント活用の有効性を明らかにすることである。そのため、本研究では、我が国のキャリア教育の在り方とシャインの提唱する「キャリア・アンカー」の概念に着目した。新学習指導要領総則では、児童・生徒が「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」について明示されている。特別活動については、「学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行う」際に、児童・生徒が「活動を記録し蓄積する教材等を活用すること」と記されたことから、2020年４月以降、全ての小学校・中学校・高等学校において、「キャリア・パスポート」が実施される。文部科学省から例示資料として示された「キャリア・パスポート」や先行実施を行っている自治体が独自に作成している「キャリア・ノート」等では、学びのプロセスの自己評価や振り返りの記述に加えて、児童・生徒が自己理解や自己分析を行うためのツールが十分に整備されてはいない。このことから、本研究では、児童・生徒が自己理解や自己分析を行うためのツールともなり得るキャリア・アンカーの概念に着目した。キャリア・アンカーの概念を意識化し、使用することは、児童・生徒が「キャリア・パスポート」を活用し、将来の職業や自分のことを考えるためにも、「キャリア・パスポート」の効果的な活用のためにも、不可欠であると言えるからである。また、本研究では、調査対象をキャリア教育の起点となる小学校段階に限定した。これは、まさにキャリア形成のスタートとなる児童期の段階の状況の解明が、後の段階の基盤となることによるものである。

2　研究の内容・研究の方法

本研究では、まず、我が国のキャリア教育の意義や役割と、シャインにおいて、「キャリアの中盤以降に適応される概念」として規定されているキャリア・アンカーの概念を小学校段階に適用することの可能性と有効性を検討した。これに続いて、本研究では、国語科、社会科、道徳科、特別活動（学級活動）、学校行事等を中心とした教科・領域において、キャリア・アンカーの概念に基づくキャリア教育を実践し、児童が自己の価値観や生き方・在り方について考える学習を展開することにより、児童の自己実現が図られることが、シャイン（2009）の「キャリア・アンカーズ セルフ・アセスメント」の40項目を小学校高学年用に改編した調査用紙を用いて検証された。第１回調査は令和元年10月３日、第２回調査は同年 12 月３日、特別活動「自分のことを知ろう」（各１時間）の時間を用いて、公立小学校第５学年 28 名を対象に実施した。フィードバックは同年12月13日に実施した。

3　研究の結果

小学校高学年用に改編した調査用紙を用いた調査結果は、(1) 自分の思いと調査結果が一致するパターン、(2) 自分があると思っていた特性・適性よりも他の特性・適性が際立った調査結果が出るパターン、(3) 自分にはないと思っていた特性・適性があるという調査結果が出るパターンのいずれも、①自己についての発見、自己の価値観等に気付いた上で、展望をもつ機会になっている、②自己についての発見、自己の価値観等に気付いている、③自己についての理解を再確認している、④他者との違いにも気付いている、⑤調査内容等の理解が不十分、言葉や会話の表出が少なく、今後のフォローが必

要である、の五つに分類することができた。この五つの分類に該当する児童の人数は、下表のとおりである。

①	②	③	④	⑤
3名	18名	3名	1名	3名

この表において、①～④に分類された 28 名中 25 名の児童は、自己を見つめ、自己の価値観等に気付くことができたと判断することができる。教室内の児童の交流の様子及び調査結果に対する反応においても、自己を新たな視点で見つめ、自己の価値観等を再認識する姿が見られた。また、補助的に行った学級担任への聞き取りの結果からも、キャリア・アンカーの概念に基づき、教師が望ましい自己の生き方・在り方を考えるキャリア教育を国語科、社会科、道徳科、特別活動（学級活動）、学校行事等を中心とした教科・領域で行い、児童が自己の価値観や生き方・在り方について考える学習を展開することの有効性が明らかになった。これは、学級担任への聞き取りにより、(1)「キャリア・アンカーズ セルフ・アセスメント」を児童が自己分析及び自己理解できるツールとして活用できることが実感されたこと、(2) 児童が自己の価値観を再認識し、改めて自分の価値観やよさに気付いている姿を通して、望ましい自分に近付こうとする機会になったと確信したこと、(3) 際立って自分に自信がもてない児童や過去に生活指導上課題のあった児童等が調査結果について友達と交流することで、自分のよさに気付いたり、自覚したりする様子が見られたこと、(4) 自分のキャリア・アンカーや特徴・能力、潜在能力、可能性等を意識し、自分の職業や未来に目が向けられたこと、(5) 学級担任にとっては児童理解、学級経営の新たな視点が与えられたこと、が明らかにされたことによるものである。

一方で、調査結果が調査期間内における学習内容・活動等だけに影響された成果なのかどうか等、今後は年度当初から意図的・計画的な学習活動を継続していくことで、変化が生じるか否かを検討していく必要がある。

4　研究の考察

本研究の第一の成果は、キャリア・アンカーの概念を小学校段階から意識することの重要性が示されたことである。変化の激しい社会や生活の中で、児童・生徒も、そして教師も自己のキャリア・アンカーを知ることは、自己の生き方・在り方を方向付ける鍵となる。本研究により、研究連携協力校の児童がキャリア・アンカーに触れ、自分の得意とするもの、潜在能力も含めた能力、自分が大切にしている価値観などを意識する時間をもったことで、児童自身の自己に対する見方が変容したことが明らかにされた。本研究の調査対象になった児童 28 名のキャリア・アンカーは 28 通りとなり、本人もしくは周囲の友達によって、児童のキャリア・アンカーを多少なりとも表している結果を得ることができた。このことは、キャリア・アンカーの概念を用いたアセスメントの活用により、児童が自己理解を深め、望ましい自己の生き方や在り方について考えるキャリア教育の実現の可能性を拓くものでもある。これが、本研究の第二の成果である。キャリア・アンカーを用いたアセスメント調査の結果に対する児童のコメントの分析や学級担任への聞き取り等から、キャリア・アンカーを用いたアセスメントを活用することの有効性は、児童の自己理解に多大な影響を及ぼしたことからも端的に伺える。ここに、本研究の目的である、児童が自己理解を深め、望ましい自己の生き方や在り方について考えるキャリア教育の実現に向けて、エドガー・H・シャインの提唱するキャリア・アンカーの概念を用いたアセスメント活用の有効性を明らかにすることが可能になる。

5　今後の展望

「キャリア・パスポート」の活用が始まることを鑑みれば、学習活動などの記録や振り返り、自己評価など、「キャリア・パスポート」への記録に併せて、本研究において行ったキャリア・アンカーの概念を活用したアセスメントの実施やキャリア・アンカーの概念を意識させる実践を積み重ねることが喫緊の課題である。学校教育の中、とりわけキャリア教育において、キャリア・アンカーの概念を活用した先行研究は皆無と言ってよい。児童・生徒の「学校」から「社会」への円滑な移行も踏まえ、キャリア・アンカーの概念を活用した授業実践や、キャリア・アンカーの意識化による学習意欲や社会参画等の児童・生徒の変容の研究は、変化の激しい社会の到来の中、時宜にかなっていくと考えられる。今後、本研究の成果と課題を十分に生かし、これを児童・生徒のよりよい成長に寄与することのできる確かな成果へと高めていきたい。